

情報感度を研ぎ澄ます! —— ビジネス情報誌 EL NEOS[ザ・ニュース]

エルネオス 2019 **12** december

「i新聞記者ドキュメント」考/SBI地銀連携/伊藤忠アマゾン迎撃/町並み保全と防災
非上場企業投資/中国メコン川支配/6G開発競争/ソニー積極投資/天皇即位「祭りの後」



<http://www.elneos.co.jp/>

お金の仕組みの摩訶不思議 第6回

「お金の仕組み」の陰の支配者に排除された “法定通貨”だったヘンプ大麻が世界を救う



ヘンプ大麻を使えば環境に良い効果をもたらすが、お金の仕組みと絡むと複雑な話になる…… (写真/ヘンプブロック=ISOHEMPのホームページから)

大麻(ヘンプ)が世界を救うといわれているがなぜか? なぜ、これまでヘンプ大麻の栽培が規制されてきたのか? 誰が、なんのためにヘンプを麻薬扱いにしてきたのか? ヘンプ大麻が活用されると世界はどのように変わっていくのか? などについて米国でベストセラーとなった『負債の網』(那須里山舎刊)の著者エレン・ブラウン氏に見解を聞いた。

産業用にヘンプ大麻を 活用する効果は絶大

—— エレンさんは、「雑草が地球を救う」というブログを書かれましたが、ヘンプ大麻が世界を救うというお考えですね。日本で大麻というと、マリファナという麻薬が頭に浮かびます。日本におけるマリファナはヘロインやコカインと一緒に扱って、依存症になるもつとも危険な麻薬の一種だと考えられています。ヘンプ大麻とマリファナ大麻は同じものですか?

ブラウン氏 別のものです。ヘンプ大麻には精神活性作用を起こすTHC(テトラヒドロカンナビオール)という成分が0.2〜0.3割しか含まれていません。ヘンプは産業用大麻とも



Ellen Brown 米国ロサンゼルス出身の作家、司法弁護士、社会活動家。公共銀行制度研究所の創始者であり会長 (<http://www.publicbankinginstitute.org/>)。『THE WEB OF DEBT』(『負債の網』那須里山舎刊)は米国でベストセラーとなり、『Public Bank Solution』(本邦未訳)では、公共銀行の必要性を説いている。最新刊は『Banking on the People』(本邦未訳)で、2019年6月1日に米国で出版された。ブログはEllenBrown.comで読むことができる。民主的な経済を研究する『The Democracy Collaborative』のフェローでもある。

呼ばれ、一万年前から人類にとって貴重な農産物であり薬草です。インドのヒンズー教では神の草と呼んでいます。——そのヘンプ大麻は雑草ですよ。それがどのようにして世界を救うのでしょうか？

ブラウン氏 ヘンプ大麻からは繊維が採れ、布が作れ、油も採れて、食料にもなります。ヘンプは百日で四〜五倍の高さに育ちます。雑草なので不毛の地でも育ち、育てるのに肥料が不要です。水もそれほど必要としません。二酸化炭素(CO₂)を吸収する能力は森林よりも優れています。そこで産業用ヘンプ大麻を大規模に栽培すれば地球を救える可能性が大きいのです。

——なるほど、アマゾンで消失している熱帯雨林の代用にもなりますね。

ブラウン氏 ヘンプ大麻から作ったプラスチック製品は環境汚染を減らせます。化石燃料を使用したプラスチックは、毎分、ダンプロック一台分のゴミとして、海洋に捨てられ海を汚染しています。そこで毎年、百万羽の海鳥が、プラスチックを呑み込んで死んでいます。でもヘンプ大麻から作ったプラスチックなら安心です。自然に分解しますし、毒性がないからです。

——石油から作られたプラスチックが、世界中の人々から、目の敵にされていますから、これは朗報ですね。

ブラウン氏 繊維産業も環境を汚染する大量の水を使い、有害物質をまき散らしています。ヘンプならば、繊維を作るのに毒素を持つ化学物質を使用する必要がありません。

——環境汚染というと、排気ガスを出す化石燃料が世界中で大問題になっています。

ブラウン氏 化石燃料のガソリンをやめて、ヘンプから作ったバイオ燃料エタノールを使うべきです。そのほうが燃費も良いですし、環境にもフレンドリーです。

——インドや中国の都会の空気汚染も改善される可能性がありますね。

ブラウン氏 ヘンプを栽培するとその土壌の微生物が多様化され、肥えた土地に変わります。根が深く張るので、土壌の深くまで湿気を持ち込むからです。さらに化学肥料などの影響で劣化した農地を再生させます。放射性物質も吸い上げます。

石油への依存を減らし 多用に活用できる素材

——福島放射能による土壌汚染の改良にも使えませんか？

ブラウン氏 使えます。少なくとも土壌に蓄積されたカドミウムなどの放射性物質を吸収してくれます。さらに吸収した後のヘンプを燃料として使うことが可能です。ヘンプの良いところは雑草なので、農地に植えることができるところです。その場合、除草剤も殺虫

剤も不要です。雑草なのでたくましく成長します。多毛作の一つとしても使えます。なにしろ百日で四〜五倍の高さに成長しますから。

——ヘンプを米国で栽培した場合、農民たちの採算は合うのですか？

ブラウン氏 もちろんです。米国ではヘンプ大麻の栽培、製品化はこれから巨大な産業になるでしょう。二〇一八年十二月にトランプ大統領が農業改善法に署名して、ヘンプ大麻の栽培が全国的に解禁されています。ヘンプは環境危機の解決策になりえます。利益率が高いので、政府の補助金なども不要です。二〇一九年四月四日の『フォーブス』誌に「産業用ヘンプこそが石油化学依存への解決策」という記事が出ています。この記事によると政府が補助金や研究費を出さなくても、市場原理でヘンプの耕作地が増えるという事です。(※下欄参照)

——石油化学に頼らない世界というのは、嬉しいですね。

ブラウン氏 石油化学への依存を減らせるのは、燃料だけでなく、プラスチック、繊維、建設資材などとして使えるからです。

——トランプ大統領が二〇一八年にヘンプ大麻の栽培を合法化したとのこと

※<https://www.forbes.com/sites/ellistalton/2019/04/04/industrial-hemp-is-the-answer-to-petrochemical-dependency/#2e4e629372d8>

ですが、禁止されていたのはいつからでしょう？

ブラウン氏 一九三七年にマリフアナ税法が施行されてからです。一九二〇年代にはヘンプ大麻を活用する技術が高まってきており、大産業に発展する寸前でした。当時の『ポピュラー・メカニクス』という雑誌には、ヘンプ大麻はダイナマイトからセロハン紙まで、二万五千種類の製品が作れると書かれています。

——ヘンプからは紙も作れるのですね。
ブラウン氏 そうですね、ヘンプは紙パルプの原料とするために森林を伐採する必要がなくなり森林保護の役に立ちます。米国防務省によると「一軒のヘンプ畑からは、同じ広さの森林の四・一倍のパルプが生産できます。その上、ヘンプ紙は木から作った紙よりも、細密で強靱で長持ちします。ベンジャミン・フランクリンの製紙工場ではヘンプを使っていました。ヘンプ大麻は一八八三年までは世界最大の農産物の一つで、紙の八〇～九〇％はヘンプ製でした。帆船の帆もヘンプ製でした。植民地時代の米国では、農民がヘンプ大麻を栽培しないこと自体が違法でした。一六三一年から一八〇〇年代まで、米国では税金の支払いをヘンプとするこ

ともできませんでした。つまり法定通貨の役割を果たしていました。

新聞王ハーストが 栽培禁止に果たした役割

——役に立つ素晴らしい雑草ですが、どうして栽培が禁止されたのでしょうか？

ブラウン氏 他の産業から見ると強力な競争相手だったからです。そこで、意図的にマリフアナ大麻と一緒にされ、一九三〇年代にマリフアナ税法によって、栽培が規制されました。でもヘンプ大麻はマリフアナ大麻ではありません。ヘンプには精神活性作用を起こす成分が少なく、マリフアナの「高揚感」をつくれません。

——当時の主な競争相手は材木産業でしようか？

ブラウン氏 材木だけでなく石油、綿石油化学、製薬業界が競争相手でした。さらに、マリフアナという名前を広めた新聞王ウィリアム・ランドルフ・ハーストが、重要な敵となりました。

——新聞王はどのような役割を果たしたのですか？

ブラウン氏 新聞王ウィリアム・ランドルフ・ハーストは巨大な森林地を所有していましたが、目的は木製のバル

ブから紙を作ることです。当時は、安価なヘンプによる紙が競争相手でした。ハーストは「イエロージャーナリズム（扇情的な虚偽の記事を掲載）」が得意

で、新聞の売り上げを伸ばしていました。だが、大麻を標的にして、「人間を凶暴化する」「白人女性が乱暴される」などのウソ情報を流したのです。これがみごとに成功して、反マリフアナ感情が高まりました。マリフアナという名称を使いはじめたのも、当時の米国人たちが持っていたメキシコ人への蔑視や偏見を利用するためでした。

——それだけで、ヘンプ大麻も麻薬とされ栽培が禁止されるのでしょうか？

ブラウン氏 ヘンプ大麻の栽培を禁止したかったのは新聞王だけではありません。ハーストには盟友がいました。デュポンという石油化学の大企業です。デュポンは当時、主としてダイナマイトの製造をしていましたが、木材パルプを漂白するための化学製品も提供していました。さらに、石油を使った繊維であるナイロンの開発もしており、ヘンプも同じような繊維を作れるので、競争相手となったわけです。

——なるほど……。

ブラウン氏 実のところ、ヘンプ製品は石油業界にとっても脅威だったので

す。ヘンリー・フォードが最初に作った自動車は、バイオ燃料から作ったアルコールで走行していたことをご存じですか？

——はい。ただ、詳しいことは知りません。

ブラウン氏 ヘンリー・フォードは、ヘンプ大麻の可能性に気づいており、広大な土地を購入し、ヘンプ大麻を栽培していました。フォードは、石油ではなく、大麻を産業の土台としようという考えを持っていて、バイオ燃料の工場を造り、技術開発をしていました。一九二〇年代の石油王であったスタンダード石油のロックフェラー家や、シエル石油のロスチャイルド家は、ヘンリー・フォードの安価なメタノール燃料にパラノイア（妄想）的危機感を覚え、石油の原価を非常に低く設定していました。その後、米国では禁酒法が生まれ、マリフアナ税法が施行され、自動車をアルコールで走らせることができなくなりました。そこで汚染を生む、効率の悪い化石燃料を使わざるを得なくなったのです。

——世界の「お金の仕組み」の陰の支配者たちが、敵となったのですね。

ブラウン氏 どこでも誰でも栽培できるヘンプ大麻を使ったバイオ燃料が普



及すると、権力の集中が難しくなります。つまり石油資本によるモノポリ(独占)ができなくなります。小さな会社でも、農地さえあればバイオ燃料を製造できるからです。

——なるほど……。

ブラウン氏 このような、ヘンプ大麻に関する情報は目新しいものではありません。「大麻草と文明(The Emperor Wears No Clothes)」(ジャック・ヘラー、一九九二年菊地書館)とか「勝利のためのヘンプ:地球温暖化の解消(Hemp for Victory: A Global Warming Solution)」(リカード・デーヴィス、二〇〇九年・本邦未訳)など、たくさんのお書物が出版されています。現在の大ニュースは米連邦政府が、



ヘンプ大麻の栽培を合法化したことで、地球を救い、動物種の多様性を維持できる時間は少なくなっています。炭素税とか技術的な解決などに時間をかけるよりも、土壌や森林や海洋の状況を改善できる自然からの恵みである雑草ヘンプに、もっと頼るべきだと思います。

第二次大戦までは日本でも栽培されていた

——雑草が地球を救えるわけですね。ところで、日本のヘンプ事情に関して、何かご存じですか？

ブラウン氏 大麻の栽培禁止は、米国の世界支配戦略の一部でした。石油を産業の土台として、石油生産地帯を支

配することで、世界諸国の首根っこを押さえる戦略です。したがって、世界各国同様、日本にも大麻の栽培禁止が押し付けられたはずで。

——第二次世界大戦で敗戦した日本は、連合国占領軍によって大麻栽培は禁止されています。戦前の日本ではヘンプ大麻しか栽培していなくて、日本政府の役人は当惑して、ずいぶん抵抗したそうです。日本にマリファナ大麻を持ち込んだのは米軍のようです。それに朝鮮半島で戦争があり、ベトナム戦争がありました。戦争は異常な世界です。マリファナでも吸ってなければ気が狂うでしょうね。日本では一九六〇年代の米国のヒッピー文化の影響も強いようです。

ブラウン氏 当惑するのは当然ですね。人類は一万年前からヘンプ大麻を活用してきています。それが米国による世界支配戦略の一環として、突然、禁止されたのですから……。

——その本家本元の米国がヘンプ大麻の栽培を解禁したわけで、時代の変化を感じますね。しかし、解禁にはマリファナ大麻は含まれていませんね。

ブラウン氏 マリファナ用の大麻は別の扱いです。米国の三十三の州がマリファナ大麻の栽培を医療用に限って認

めています。許可が必要です。米国の十の州では、嗜好品として、マリファナ大麻の加工品を飲んだり食べたり、吸ったりしても合法です。

——マリファナ大麻は医療用として、見直されてきているわけですね。がん、癲癇、認知症、疼痛、緑内障、偏頭痛などの病状を劇的に改善すると聞いています。個人的にはマリファナ製鎮痛剤は、モルヒネよりも鎮痛効果があるというので興味を感じています。将来のことになります。癌を患ったら、鎮痛剤が救いの神でしょうから。

ブラウン氏 [WEED (雑草)]というドキュメンタリーが米国で話題になりました。五歳の子どもが二時間ごとに癲癇を起こす難病に苦しんでいたのに、マリファナ製の癲癇薬を飲みはじめたら、一週間に一回しか癲癇を起こさなくなり、通常の子どもに戻れたという話ですが、世界中の大麻による医療の現場を取材したドキュメンタリーです。インターネットで「WEED CNN」を検索すれば、すぐに見ることができます。——米国の世界支配の欲望のために、ヘンプ製プラスチックの生産が八十年以上も遅れてしまいました。早く製品化してほしいと思います。

(以下、次号に続く)